MUSASHINO for TOMORROW Vol.102

巻　頭
夢があるから強くなる
川淵三郎

卒業生インタビュー
フルートの新たな可能性を求めて
フルートデュオ 櫻舞 -aube-
白石法久　山内豊瑞

私の学園生活
素晴らしいスタッフに支えられて感動体験
～武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」に出演して～

表紙：丸山　勉（ホルン）

July 2012
vol.102

夢があるから強くなる

川淵三郎

公益財団法人
日本サッカー協会
名誉会長／キャプテン

川淵三郎 *Saburo Kawabuchi*

1936年、大阪府高石市生まれ。三国丘高校からサッカーを始め、早稲田大学2年で日本代表に選出される。以後、ローマ五輪、ワールドカップチリ予選、東京五輪などに出場。'61年古河電工に入社しサッカー部でプレー、コーチを経て'72年より同部監督。日本サッカーリーグ常任運営委員、ロサンゼルス五輪強化部長、日本代表監督、日本サッカーリーグ総務主事、（財）日本サッカー協会理事を歴任。'91年古河電工を退社、（社）日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）初代チェアマンに就任。'02年～'08年、日本サッカー協会第10代会長。現在は同協会名誉会長。

1998年に初出場したフランス大会以後、ワールドカップに4大会連続して出場している日本サッカー。この躍進の原動力となったのは、'93年に発足した日本初のプロサッカーリーグ「Jリーグ」であることは誰もが認めるところ。当時、「時期尚早」「前例がない」という激しい抵抗にあいながら、悲願のプロ化を実現させた立役者が現日本サッカー協会名誉会長の川淵三郎さんです。夢を持ち、チャレンジしつづけることの大切さを“キャプテン”が熱く説きます。

夢を叶えた友人と何もしなかった僕

意外に思われる人もいると思うが、少年時代の僕の夢は指揮者になることだった。

小学4年生の時、放送劇などの脚本を書いていた吉岡たすく先生（児童文学研究家）が母校の高石小学校に赴任してきて、読み書きがしっかりできる子どもを選んでNHKラジオの放送劇に出演させた。初めての演劇に大興奮した僕は、先生が劇団を立ち上げると真っ先に入団した。

当時の放送劇は全て生放送。劇の合間にはオーケストラの生演奏が入る。その中で僕の心を虜にしたのは指揮者だった。大楽団を前にタクトを振るう指揮者は堂々としていて格好よく、僕にとって、多くの演奏家を束ねるヒーローだった。

それから30年を経て古河電工の営業マンとして仕事に打ち込んでいたある日のこと、吉岡先生の劇団で一緒にやっていた同級生が指揮者になったという噂を耳にした。指揮者になりたいと思っただけの僕とは対照的に、彼は思いを“夢”に終わらせず、専門知識と技能を身につけて実現させたのだ。僕は不覚にもそのとき初めて目標に対する認識の甘さというものを思い知らされた。不意打ちされたようなショックだった。

幼いころから何でもやりたがり屋だった僕は、学校と演劇の稽古以外の時間は水泳や野球、相撲など、ありとあらゆるスポーツに熱中した。中でも野球は大好き。大阪出身の僕はもちろん阪神タイガースの大ファンで、人気選手のブロマイドを集めては友達と見せ合っていた。

スポーツ以外にも色々なことに興味を持った。隣のおばさんに三味線を教わったこともあるし、そろばん塾にも通った。書道だって習ったことがある。筆の使い方は今も覚えていて、サインを頼まれると大抵は筆ペンで書く。時たま「きれいな字ですね」と褒められることもあるが、きちんと習った人からすればつたない素人の字。あの時、もっとちゃんと習っておけばよかったと後悔しきりである。

演劇とサッカー

好奇心は旺盛だが、なかなか長続きしない。つまり、典型的な三日坊主。その中で唯一続いたのが演劇とサッカーだった。

僕が1歳になる年に父は軍隊に召集された。その7年後に除隊し、今度はサトウキビから燃料を作る会社を立ち上げるためジャワ島に渡った。だから僕は物心つくまで父を知らずに育った。吉岡先生に父親を重ねていたのだろう。先生と一緒にいるのが楽しくて、小学4年から高校2年まで演劇を続けた。

高校は大阪府立三国丘高校に進学した。1951年に民間放送ができると、生放送だったラジオ劇もテープに収録できるようになっていた。娯楽がテレビへと移行するにつれ、僕の足は徐々に演劇から遠のき始めた。そして忘れもしない高2の夏、友達とい

つも行くパン屋でパンをほおばっていると、ラジオから僕らの劇が流れてきた。その時、僕は初めて自分の声を聴いた。

もっとしゃきっと男らしいと思っていたのに、ラジオから流れてきた僕の声は鼻にかかった甘ったるい声で、もう愕然。あまりのショックに、7年も続けていた演劇をあっさりやめてしまった。

いつも「自分の道は自分でしっかり考えなさい」と言っていた先生は、退部を申し出た僕の意思を尊重してくれた。それでも吉岡先生との親交は、先生が85歳で亡くなるまで続いた。

不純な動機で始めたサッカーでオリンピック代表に

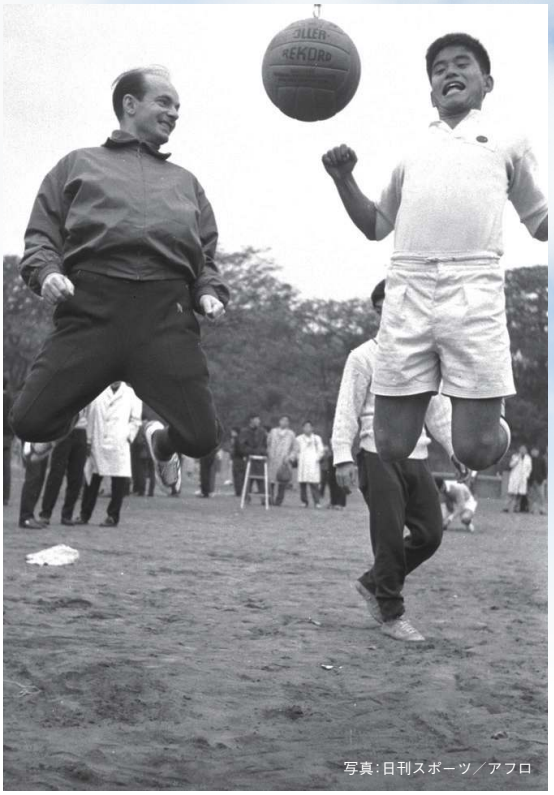
サッカーを始めたのは不純な動機から。1年生の時にハンドボール部の新人戦に出場し、そのまま続けようと思っていた矢先、友人が「サッカー部に入ると四国に行ける」という耳寄りな情報を持ってきた。

まだ貧しい時代、遠征で泊まりとなるとみんな米や味噌などを持参する。海を渡って行く四国は外国のようなもので、僕はその甘言につられてサッカー部に入ることに。しかし、サッカーは泥まみれになるし、スライディングは痛いし、しかも当時のボールは革で表面に紐の結び目があり、ヘディングなどしようものなら涙が出るほど痛い。汚い、痛い、辛い。ちっとも面白くなかった。四国に行く目的を果たすと元来の三日坊主が頭をもたげ、幼い時に患った気管支炎を持ち出して退部を申し出た。ところが、先輩に泣きつかれてずるずる続けることに…。

頃合いを見て辞めようと画策していたが、徐々にサッカーの面白さに目覚め、先輩の“しごき”もあってメキメキと上達。2年生になる頃にはサッカーに夢中になっていた。それからはサッカー三昧。当然、受験勉強に出遅れて入試に失敗し、浪人中も予備校になど通わず母校で後輩に交じってサッカー漬けの毎日を送った。そんなわけで翌年も落ちて2浪目。しかし、その熱心さを見ていたサッカー部の先輩が推薦してくれて、3年目にようやく強豪校の早稲田大学に合格。1年生からレギュラーとして活躍するようになった。

大学でプレーするようになると五輪への憧れが強くなる。当時の日本代表のユニフォームは、胸に大きく「JAPAN」の横文字が書かれた緑色のジャージだった。それを着たい一心で練習に励むと、2年生で日本代表に抜てきされた。

日本サッカー協会(JFA)は4年後に開催される東京五輪に向け、野津謙会長の英断で西ドイツ(当時)からコーチを招聘し、約50日間の欧州遠征を行うことを決めた。ローマ五輪開催中の1960年夏、大学4年の僕は日本代表のメンバーとして遠征した最初の滞在地・デュイスブルクで、吉岡先生と並んで僕の人生の師となるデットマール・クラマーコーチと出会う。



▲ 恩師デットマール・クラマー氏(左)から
ヘディングの指導を受ける若き日の川淵さん(1960年)

ドイツ遠征で衝撃を受けた先進国のスポーツ環境

今では考えられないことだが、僕たち代表選手はこのとき初めてリフティングを習った。ヘディングも額でやることをこの時に教わった。しかも、指導者が実際にやって見せるということにも驚きだった。

クラマーさんの指導はもちろんだが、整備されたスポーツシューレの環境も見事だった。当時は日本代表の練習場ですら石ころが転がる土のグラウンド。しかし、ドイツのそれは青々とした美しい芝生だ。体育館では車椅子の人たちが、低いネットを張ってバレーボールのような競技を楽しんでいた。身障者がスポーツを楽しむなんて当時の日本では考えられないこと。何もかもが衝撃的だった。

この時、写真や新聞の切り抜きなどで作った日記風のアルバムにこう記している。「広々とした素晴らしい芝生のグラウンドに先ず驚かされる。三つの体育館、宿泊所、教室、ボーリング場、食堂、事務所などなど…。みんなの口からため息がもれる。芝生のグラウンドが8面もあり、それが白

樺の林に囲まれて、まるで公園にでも来ている様だ」。ちなみにこの“遠征アルバム”、日記の部分はわずか4日で終わっている。

ともかく、ドイツの合宿は驚きの連続だった。「ドイツに生まれた人は幸せだなあ」と心底うらやましく思いながら、日本にそれを望むのは何年経っても無理だろうとその時思った。

写真：岡沢克郎／アフロ

▲ Jリーグ開幕戦 ヴェルディ VS マリノス。試合前の記念セレモニー（1993年5月15日）

夢のオリンピック

東京五輪まであと2年というときに脊椎分離症を患った。サッカーを断念せざるを得ない危機的状況に陥りながらも、ギリギリの段階で代表に選ばれ、1964年10月、夢の五輪の舞台に立つ。初戦の相手は優勝候補のアルゼンチン。靴の手入れを怠って絶不調に陥っていた僕は、後半になって辛うじてダイビングヘッドで同点弾を決めると、それから好プレーを連発し、その後の決勝点をアシストした。3-2で逆転勝利。ロッカールームは大勢の人たちでごった返していた。すると、クラマーさんは選手だけを集めて話し始めた。

「今日、君たちは多くの新しい友人に取り囲まれるだろう。その人たちと喜びを分かち合いたまえ。でも今一番慰めを必要としているのはアルゼンチンのチームだ」。そう言ってアルゼンチンのロッカールームに行ってしまった。その時は何を言っているのか分からなかったが、その後、チェコに惨敗するとクラマーさんは再び選手を集め、「君たちがよく頑張ったのは僕が一番知っている。今日、君たちのところに来る友人は少ないだろう。しかし、その友人こそが本当の友人だ」と語った。

この逸話は、僕がJリーグチェアマンになり、Jリーグが爆発的な人気を博したとき、そしてJFAの会長になり、日本代表がドイツワールドカップで惨敗を喫したときなど、その時々に僕の慰めとなり、戒めとなっている。

五輪後もサッカーと仕事の二束のわらじを続け、33歳で現役を引退。その後、監督や五輪の強化部長など

平成23年度音楽学部新人演奏会

平成24年4月17日　津田ホール

田中里幸（マリンバ）

溝邉奈菜（ヴァイオリン）

青木佑磨（ピアノ）

三井崇裕（クラリネット）

塚村 紫（ソプラノ）

木林理絵（ピアノ）

を務めたが、改革もなく弱体化していく日本サッカー界に嫌気がさし、サッカーから完全に手を引いた。同期の中でも昇格が早かった僕は「いずれは本社の重役」と将来を思い描き、仕事に打ち込んだ。ところが51歳の春、突然、子会社への異動を告げられる。まさに青天の霹靂。僕にとっては受け入れがたい左遷だった。

子会社で仕事に専念しようと決意したある日、日本サッカーリーグ(JSL)の総務主事の話が舞い込んできた。プロ化の機運が高まりつつあった時で、僕はサッカーに夢を見出そうとその舵取り役を引き受けることにした。その後は社業とJSLに奔走する毎日。「プロ化は時期尚早」と反対され幾多の荒波にもまれながらも、僕たちはプロ化の大海原へと漕ぎ出していった。

そして1991年、「地域に根差したスポーツクラブづくり」をコンセプトにJリーグが誕生する。

三日坊主のすすめ

経済学者の中谷巌氏は、「一つの事に一万時間、死に物狂いで没頭してみれば、必ずその道でひとかどの人物になれる」と著書に記している。三日坊主だった僕が五輪の舞台に立てたのも、サッカーのプロ化や日本のW杯出場に立ち会えたのも、好きなサッカーに情熱を注いできたからこそ。国際会議やメディアを前に物怖じしないのは、子どもの頃の放送劇のお陰と言えるだろう。聞きかじったことも全てその後の人生につながっている。

そういう意味で、僕は三日坊主を推奨する。やってみるということは関心があるからで、色々取り組むうちにいつか没頭できるものが見つかるはずだ。好きなことを見つけられたらそれが人生のチャンスだ。そして、絶えず感性を磨き、アンテナを立てておくこと。

僕がドイツで受けた感動と諦めが30年もの年月を経てJリーグの理念に「スポーツ文化の振興」として明文化されたように、その時は不可能なことも、いつかそれを叶える好機に恵まれることもある。

武蔵野音楽大学の皆さんは、音楽という明確な目標を持ってその才能を磨いているだろうが、最近の若い人、特に男性は車や海外旅行にも関心がなく、女の子にも消極的だと聞く。失敗や傷つくことを恐れて何もしないことが最大の失敗。“現状維持”は衰退を招く。夢を持ち、それに少しでも近づくために懸命に取り組む。その努力が知識となり、見識となり、やがて胆識となる。懸命に取り組むことで人との交流が広がり、自らの人間力を高めて夢を実現する力となる。

日本サッカー協会がスローガンにしている「夢があるから強くなる」、これを青春真っ只中の皆さんにエールとして贈りたい。

平成23年度大学院修士課程新人演奏会

平成24年5月14日　津田ホール

中島有紀(打楽器)

大久保 智(ヴァイオリン)

青木絵里子(フルート)

三浦麻葉(ハープ)

波佐間成美(ソプラノ)

竹中千絵(ピアノ)

卒業生インタビュー

フルートの新たな可能性を求めて

フルートデュオ 櫻舞 –aube–

● 白石法久 ● 山内豊瑞 ●

武蔵野音楽大学在学中に、先輩・後輩のコンビで結成されたフルートデュオ「櫻舞（おうぶ） –aube-」。それぞれソリストとしても活躍する白石法久さんと山内豊瑞さんが組んで繰り広げるアンサンブルの評価は高く、様々なコンクールで優勝、入賞を果たし、コンサートでも多くの聴衆を魅了しています。秋のリサイタルツアー、来春のCD発売も決まり、今後の大いなる飛躍が期待されるお二人にフルートデュオの醍醐味や魅力、武蔵野時代の思い出などを伺いました。
（2012年5月9日取材、文責編集部）

白石法久 *Norihisa Shiraishi*

群馬県出身。東京農業大学第二高等学校、武蔵野音楽大学卒業。第14回びわ湖国際フルートコンクール・一般部門にて第1位受賞、併せてオーディエンス賞（聴衆賞）、滋賀県知事賞、朝日新聞社賞、京都新聞社賞を受賞。第26回日本管打楽器コンクール第五位。第20回宝塚ベガ音楽コンクール本選入賞。第1回三田ユネスコフルートコンクール本選入賞。第13回日本クラシック音楽コンクール・フルート部門最高位受賞。第25回かながわ音楽コンクール・フルート部門第2位。この他、櫻舞としての活動も含め受賞歴多数。2009年、神奈川フィルハーモニー管弦楽団契約首席奏者を務める。これまでにソリストとして東京ニューシティ管弦楽団、武蔵野音楽大学管弦楽団と共演。また、映画「のだめカンタービレ」、CM「Soft Bank」など、さまざまなレコーディングにも参加している。フルートを甲斐道雄氏に、室内楽を岡崎耕治氏に師事。

デュオの魅力

── お二人のフルートとの出会いは？

白石　中学の吹奏楽部で始めたのが最初です。僕には姉が二人いて、それぞれオーボエ、クラリネットをやっていました。「三人で合奏したい」という姉たちの意向で、半ば強制的に僕はフルートの担当になったというわけです。

山内　ピアノ教師をしている親の勧めで小学校時代に1年ほど習ったのですが、すぐやめてしまいました。高校で、気になる子がいるからという理由で吹奏楽部に入って再開したんです。

── 櫻舞を結成するに至った経緯をお聞かせください。

白石　管楽器の男子は人数が少ないせいもあって、学年を越えて普段から一緒に練習したり、アンサンブルをしたりすることが多かったんです。その流れの中で、自分たちの力がどの程度通じるものなのか確認したくて、「日本現代音楽演奏コンクール」に山内君と組んで出場したのが始まりです。

── ソロとデュオの一番の違いは何でしょう。

山内　それぞれに面白味はあります。事前にじっくりと準備をして、自分ならではの音楽や音色を表現するソロの面白さ。デュオはもちろん相手に合わせることは必要ですが、押したり引いたりしつつお互いが信頼関係を持って自由に演奏できるのが楽しいですね。

── お二人のデュオの特長は？

白石　アンサンブルに関しては誰にも負けないという自負があります。それがあるから本番で感性をぶつけられる、時にはお互いをびっくりさせるような吹き方もできる。アンサンブルの最小単位である、二重奏ならではの生々しさを感じてもらえると思います。

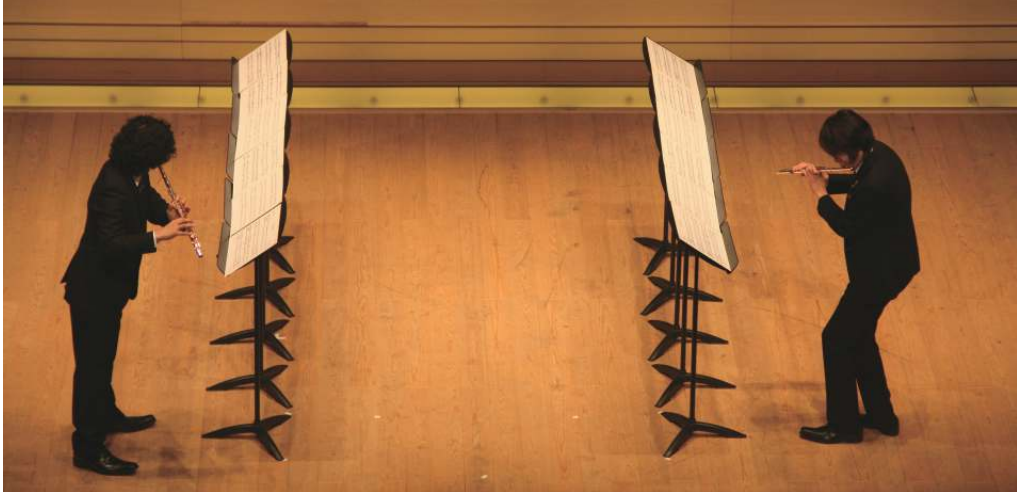
山内　例えば、ギリギリのラインの中、ずれる寸前までわざとアグレッシブに攻める。相手がそれに応えてくれる。そんなスリリングな感じが最高ですね。

白石　お客さんに楽しんでいただくのは当然ですが、僕自身は本番で彼がどんなふうに仕掛けてくるのか、それがすごく楽しみです。

山内　こうした冒険ができるのも、やはり学生時代からプライベートも含め長く一緒にいて相手を知り尽く

しているからではないでしょうか。

白石　理屈では説明できなくても、いい音楽はいい――今までの音楽にはない作り方やアプローチの仕方、二人の感性でそんな音楽を目ざしています。



▲ 2011年フルートコンベンションコンクール 優勝者によるガラコンサート（2011年12月）　©THE FLUTE編集部

コンクールへのチャレンジ

── お二人は、これまでに数多くのコンクールにチャレンジしてきました。

白石　コンクールへの出場は結果がどうこうではなく、それを目ざして努力する過程こそが大事だと思っています。コンクールに出て同世代のライバル達と交流を深めたり、彼らの演奏を聴くことも大いに勉強になります。

山内　学生時代は僕も同じように考えていました。出場して2次か3次まで残ればいいなと。でも最近は結果を残すことが大きな目標になっています。それくらい貪欲にならないと1位は取れません。

── コンクールで一番苦労したのは？

白石　僕は暗譜が苦手なので、暗譜が基本の1次、2次試験が鬼門。今でも1次が一番苦手ですね。時間も短いので、一度ミスをすれば挽回も大変ですし。

山内　1次、2次は基本的に簡単な曲。それをいかに正確に、完璧に仕上げるかが問われます。3次以降、本選は自分の好きなスタイルで演奏すればいいわけですから、そういう意味で1次がいかに大事かということですね。

── コンクールに出場することの一番のメリットは何でしょう。

白石　大勢の先生に審査されるなかで、自分の進んでいる方向が正しいのかどうか、練習してきたことが身に付いているかどうか、などの確認ができるのは大きいですね。

山内　自分なりに良い演奏ができたと思っても結果が伴わない時、審査員の先生にどこが悪かったのか尋ねます。もちろん納得できる場合と、できない場合がありますが。

── コンクールで演奏することの難しさは？

白石　コンクールでは、好みの分かれる演奏はできません。審査員全員がそれなりの評価をしてくれる演奏をしなくてはなりません。

山内　ですから、時には自分が目ざすものとは違った音楽をしなければならないこともあります。ただ、そうした経験も演奏家として仕事をしていくうえで、オーケストラとアンサンブルをしたり、他人と合わせたりする際に役に立っています。

武蔵野の思い出

── 武蔵野時代を振り返ってください。

白石　一番の思い出は、甲斐道雄先生との出会いとレッスンですね。僕にとって生涯の師と言えるのは甲斐先生だけです。バロックから時代を追って教えていただき、フルートのレパートリーはほぼ網羅するくらい、エチュードを含めれば軽く200曲以上吹いたんじゃないでしょうか。先生の指導は素晴らしくて、レッスン時間の1分1秒も惜しいくらいでした。ただ、先生との出会いは苦いものでした。最初の講習会の時、ものすごい雷を落とされたんです。もう泣いてしまうくらい。先生は僕に本気で音楽に取り組む覚悟があるのか、それを問いただしてくださったんですね。武蔵野の4年間で、音楽の楽しさ、そして同時に音楽の怖さを教えていただきました。人間的にも成長できたかなと思っています。

山内　大学に入ってすぐ、自分がいかに遅れているかを痛感しました。高知から出てきた僕はコンクールにも出たことがなく、どんな曲がある

山内豊瑞　*Toyomitsu Yamauchi*

高知県出身。高知西高校、武蔵野音楽大学卒業後、渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院にて演奏家資格を取得。第1回三田ユネスコフルートコンクール第1位、窪田孝子賞受賞。第16回びわ湖国際フルートコンクール・一般部門本選入賞。第15回フランス国際ジュンヌフルーティストコンクール第2位。第11回日本クラシックコンクール・フルート部門最高位受賞。この他、櫻舞としての活動も含め受賞歴多数。サイトウキネン音楽フェスティバル、小澤征爾音楽塾に参加。東京ニューシティ管弦楽団、プリマヴィスタ四重奏団らと共演。日・仏各地にてソロリサイタルを実施。現在、オーケストラや室内楽、レコーディング等でも活躍し、後進の指導にも当たる。これまでにフルートを工藤重典、工藤雅子、白尾隆、山中淳二の各氏、室内楽を磯部周平氏に師事。オーレル・ニコレ、マクサンス・ラリュー、フィリップ・ベルノルド各氏の元で研鑽を積む。

のかも知らず、ただ先生に言われたエチュードなどを吹く程度。ところが他の同級生は聴いたこともないような曲を、普通に練習しているんです。これはマズイと焦りました。みんなに追いつこうと、それ以後は毎朝6時から晩まで吹きつづけました。今にして思えば、入間時代は信じられないくらい練習しましたね。高校からレッスンを受けてる恩師の白尾隆先生は、甲斐先生と同じように数多くの曲を課すタイプ。完璧に仕上げなければ次の曲に進めませんので、とにかく練習して完璧にして持って行ってOKを貰い、どんどんレパートリーを増やしました。

フルート二重奏をメジャーに

── 武蔵野の後輩へメッセージをお願いします。

山内　コンクールには積極的に出たほうがいいし、演奏会にもどんどん行ったほうがいい。あと、良い意味で遊びは大切です。あちこち旅をしたり、恋愛したり、いろいろ経験して視野を広げることを勧めます。プライベートが充実していないと、いい音楽はできないですよ。

白石　あれを勉強しておけば良かった、これを学んでおけば良かったと卒業してから思うもの。やっぱり受け身ではダメですね。効率的な練習をするには、時には楽器を置いてじっくり楽譜を読み込むことも大事。武蔵野には楽譜や音源のコレクションなどが充実していますから、利用しないと勿体ないですよ。

── 最後に櫻舞としての今後の抱負をお聞かせください。

白石　フルート二重奏が演奏会の定番の編成になるくらい、メジャーなアンサンブルにしたいですね。フルート二重奏の可能性と魅力を伝えていきたいし、二重奏の曲をどんどん発掘して紹介していきたい。今秋のツアーが決まりましたが、毎年リサイタルツアーも行いたいと思っています。

山内　これからも、フルート2本だけ、ピアノもなし、曲はバロックと現代曲だけ。こうした縛りの中で、可能性を突き詰めて行こうと思っています。そしていつの日か、かつて僕が学んだフランスの地でコンサートができたらいいですね。

フルートデュオ 櫻舞 -aube-

2004年、武蔵野音楽大学在学中に結成された山内豊瑞と白石法久から成るフルートデュオ。結成1年目で日本現代音楽演奏コンクール、日本フルートコンヴェンションコンクール・デュオ部門、びわ湖国際フルートコンクール・アンサンブル部門と、立て続けに優勝、入賞。2011年、日本フルートコンヴェンションコンクール・アンサンブル部門において優勝し、同年のリサイタルツアーは全4公演全て満席。今秋には熊本、福岡、広島、高知、香川、大阪、愛知、新潟、群馬、東京の全国10ヵ所でのリサイタルツアーを予定。来年4月、マイスターミュージックから初のCDが発売される。

櫻舞 -aube-のBLOG
http://flutoyomitsu.blogspot.jp/

音楽の万華鏡 ⑳

日本の「交響曲」100年

ドビュッシー生誕150年、ジョン・ケージ生誕100年に比べると地味かもしれませんが、今年は、日本人による初めての交響曲とされる山田耕筰の《交響曲「かちどきと平和」》の作曲年（1912年）から100年目にあたっています（その割にオーケストラ演奏会で同交響曲を取り上げるという話題を聞きませんが）。その後山田は交響曲と題する作品をほとんど書いていませんし、のちの世代の作曲家たちも必ずしも交響曲と題する作品を多く書いているわけではありません。しかし、交響曲と題さない自由な管弦楽曲よりも、交響曲と題された作品のほうに、その作曲家の真剣勝負のようなものを感じることがあります。

諸井三郎の《交響曲第2番》（1938）は動機労作や対位法が駆使されて、独墺の交響曲に対する畏敬の念が伝わってくる作品ですが、諸井の《交響曲第3番》（1944）は、しつこいくらいにモチーフを繰り返すなど、交響曲の手本と諸井の主張が対峙しているのを感じさせます。橋本國彦の《交響曲第1番》（1940）は、ダイナミックな交響曲の構成に異を唱えるように緩やかな曲想が支配しているので、この作品をなぜ交響曲と呼ぶのだろうと感じさせます。フランス・アカデミズムの典型のように言われる矢代秋雄の《交響曲》（1958）も、フランスふうと言うよりも、矢代ふうとしか形容できないような、張りつめた音で満たされた作品となっています。

これらの交響曲に見られるのは、アメリカの様々な旋律素材が矢継ぎ早に出てくる、チャールズ・アイヴズの《交響曲第2番》（1902）のように前面に出された個性と違って、むしろ交響曲のうしろに引っ込んでいる控え目な個性ですが、その引っ込んだ個性を聴き取ることが大事と思います。リストの《ファウスト交響曲》（1854）やメシアンの《トゥランガリラ交響曲》（1948）も、交響曲に対する畏敬の念と、交響曲からこぼれるものとで独自の交響曲を提起したように、日本の交響曲には、他の国の作曲家とは違う交響曲観があると思われます。

楢崎洋子（本学音楽学教授）

素晴らしいスタッフに支えられて感動体験

～武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」に出演して～

去る4月29日・30日、5月2日・3日、全4回にわたり、武蔵野音楽大学のオペラ公演「魔笛」が本学ベートーヴェンホールにて開催され大盛況を博しました。この公演は、カリキュラムにオペラコースを置く武蔵野ならではのものであり、キャストには現在第一線で活躍している本学教員とオーディションで選ばれた学生、本学出身のオペラ歌手の方々を起用。さらに、指揮の本名徹次氏、演出の十川稔氏を始めスタッフも斯界のトップクラスを招聘しました。今回は、大成功をおさめた同公演に出演した学生および若手歌手4名に、オペラ出演を通して学んだこと、感じたことなど語っていただきました。（座談会:5月16日実施）

プロの先輩、先生方との共演

── 今回のオペラ出演に至る経緯をお聞かせください。

仲松　私はいただいたチャンスは全て挑戦したいと常に思っています。「魔笛」への出演は夢でしたので、迷うことなくオーディションを受けました。

望月　僕にとって、オペラ出演は大学入学時からの大きな目標。実は大学3年生だった前回のオペラ公演の時、合唱で出演するはずだったのが、病気になって本番に出られませんでした。その時、次回チャンスがあれば絶対に役をつかもうと決意し、今回のオーディションを受け無事役をいただけました。

▲ パミーナ役の前川さん（右）と
パパゲーノ役の望月さん（左）

杉尾　僕はオペラコースを専攻していたということで、合唱とともに、弁者とザラストロのアンダー＊として推薦していただき出演が叶いました。

＊アンダー（Understudy）とは代役のこと。
出演者が病気等で休演した際、代わって出演する。

── 前川さんはプロとして数々のオペラに出演されていますね。

前川　現在は新国立劇場の合唱団員、契約メンバーという形で合唱のあるオペラ公演には全て出演しています。今回はオーディションがあることを大学の演奏部の先生から伺い、パミーナという役に以前から興味があったのでぜひ受けてみたいと思いました。

── 実績のある先輩方、先生方と共演していかがでしたか。

望月　パパゲーノは他の役との絡みが多いのですが、先輩たちがやりやすい状況をつくってくださりとても心強かったですね。

仲松　先生方が私のような学生と真剣に共演してくださるというのが、嬉しくて夢のようでした。稽古の合間の何気ない会話など、一言一言すべてが勉強になりました。

杉尾　僕はA・B両キャストのアン

前川依子　*Yoriko Maekawa*

京都府出身。武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科を経て、同大学院修士課程修了。武蔵野音楽大学オペラ公演「フィガロの結婚」スザンナ役でオペラデビュー。以後、「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ、「コジ・ファン・トゥッテ」デスピーナ、「劇場支配人」ヘルツ夫人、「こうもり」アデーレなどの役で多彩なオペラに出演。2007年より新国立劇場合唱団に所属し、契約メンバーとしてほぼ全公演に参加。ソリストとしても「真夏の夜の夢」妖精役、フォーレ「レクイエム」、ラインベルガー「レクイエム」等に出演。第19回宝塚ベガ音楽コンクール第2位、第13回世界オペラ歌唱コンクール「新しい声2009」アジア予選ファイナリスト。声楽を藤原俊輔、和田みのり、生島啓子、近藤伸政、長町順史、オペラ解釈を田島亘祥の各氏に師事。京都音楽家クラブ会員。本公演ではパミーナを演じた。

▲ 十川先生から指導を受ける出演者たち

ダーとして立つ機会があったので、たくさんの先生方と共演、練習を一緒にでき、素晴らしい経験になりました。

── 前川さんは後輩と共演していかがでしたか。

前川　稽古を通して感じたのは、私自身の学生時代と比べて皆さん意欲的といいますか、勉強したいという意欲がすごく強くていいなと思いました。

超一流のスタッフの指導を受けて

── 稽古を振り返って印象深かったことは？

前川　学生時代にも武蔵野のオペラを経験していますが、卒業して外の世界を知って思うのは、裏方さんを含めこんなに超一流のスタッフの方々と一緒にできるなんて本当に恵まれているなということ。メイクにしても、衣裳にしても、あそこまで細かくサポートしてくださる現場はそんなにありません。また、今回は指揮と演出の先生を外部から招いたということもあり、“教える”ということを、特に十川先生などは重要視されていたのではないでしょうか。

杉尾　舞台監督が、アンダーの僕に対しても細かくアドバイスしてくださいました。少しでも舞台を良くしよう、後輩を育てようという気持ちがひしひしと伝わってきました。

望月　スタッフの方々から細かいアドバイスや丁寧なサポートをいただき、本当に助かりました。オペラというのはこうして作っていくのだなということを、身を持って体験できました。

望月一平　*Ippei Mochizuki*

静岡県出身。常葉学園橘高等学校音楽科卒業。武蔵野音楽大学卒業。現在同大学院修士課程２年次在学中。本学卒業演奏会出演者に選抜、本学オペラコース試演会「ドン・ジョヴァンニ」マゼット役、「愛の妙薬」ドゥルカマーラ役、「チェネレントラ」アリドーロ役で出演。第16回「静岡の名手たち」オーディション合格、合格者による演奏会に出演。これまでに打田忠義、平良栄一、堀内康雄の各氏に師事。本公演ではパパゲーノを演じた。

印象深い先生のお言葉

── 諸先生方から学んだこと、エピソードをお聞かせください。

望月　パパゲーノを演じることに関して、十川先生から言われた印象的な言葉は「我慢をしろ」です。笑いを誘うような台詞が多かったのですが、台本以上のことをしてしまうと、お客様にパパゲーノという人物の素直な面白さがうまく伝わらないとアドバイスをいただきました。また2回公演というのは、1回目がうまくいくとそれをなぞってしまう傾向にあります。これも十川先生の言葉ですが、「うまくいったことをなぞると、絶対うまくいかない。1回目とは違うアプローチをするように」。前回とは違った視点で、もっと大きくするようなイメージでやりなさいということですね。

前川　先生ごとに「魔笛」に対するイメージや音楽観は違いますが、前川依子としてのパミーナというキャラクターを考えてくださったように思います。最初、本名先生はバロック風の音楽作りを提示されました。キャストはそれに合わせつつ自分の良さが出せるテンポ感や演技とのバランスの取り方を努力したと思うのですが、最終的には先生が「自分のやりたいようにやっていいんだよ、合わせるから」とおっしゃってくださり、すごく演じやすかったです。

仲松　音楽稽古の中での先生のお言葉で印象深いのは、「子供の役だからといって甘くみるな」というもの。少年の役は、外国では本当の子供が演じることが多いのですが、今回のメンバーはみんな20歳以上。子供らしさを出しながら、ハーモニーも台詞もきちんと合わせないといけない。そうしたことが難しく、また勉強になりました。

杉尾　音楽指導の横山先生は、「アンダーはキャストより先に覚えなければいけない」と常におっしゃっていました。立ち稽古の際、アンダーが歌えないことで止めてしまうのは、最もしてはいけないことなんですね。

── 仲松さんはパパゲーナのアンダーも兼ねていたということですが。

仲松　オペラの中での台詞は初めての経験で、しかもおばあさんの声。それが難しくて。谷先生に相談したら、「パパゲーナは最後の二重唱が大事だから、良い声をとっておかないといけない。そこまでに台詞で喉を傷めてし

▲ コミカルにパパゲーノを演じる望月さん（左）

▲ 合唱≪奴隷≫で出演した杉尾さん
（後列右から３人目）

まわないように」とアドバイスしてくださいました。

── アンダーはなかなか大変な役割のようですね。

杉尾　「必ず誰よりも早く入っていなさい。何が起こるかわからないから、いつでも歌える準備をして稽古場に来なさい」と言われていました。公演の期間中も早く入って、発声をして、何もないことを祈りつつ待っていました。

オペラの魅力、楽しさ

── 今回、大きな舞台を踏んでの率直な感想は？

望月　カーテンコールの拍手は、今まで経験したことのないもの。これは癖になるなという感じです。本番を臨むにあたって僕らが集中しやすい環境をスタッフの方々が作ってくださったこと、皆さんに支えられてここまでこれたんだということを終わった後に実感しました。

仲松　本番は今までになく緊張しました。でも開き直って舞台に出て、楽しみながら無事に終えることができました。沖縄の家族や先生、友達や先輩、後輩もたくさん来てくれました。オペラ初体験の友達が、「オペラって、こんなに楽しいんだね」と言ってくれたのが何より嬉しかったですね。

杉尾　合唱を務めながら舞台をじっくり見ることができ、本番の全てが大きな勉強となりました。カーテンコールの後、みんなでお辞儀して拍手をもらっている時、「次は必ずアンダーじゃなくてキャストとしてここに立ちたい！」と、そればかり考えていました。

前川　ベートーヴェンホールは学生時代から歌っている会場ですが、今回、「魔笛」にぴったりの会場だと実感しました。大きすぎると細かい演技が伝わらなかったり、逆に小さすぎても大味になってしまったりしがちなのですが、このホールはお客様との距離が近すぎず遠すぎず、ちょうどいいと思いました。

ずっと歌いつづけたい

── 最後に今後の抱負をお聞かせください。

杉尾　オペラの勉強になることには積極的に参加し、先生方からいろいろ指導していただきながら一歩ずつ成長していきたいと思います。

仲松　今回、目標であり憧れの先輩や先生方から多くを学んだように、いつかは自分が後輩の目標になれるよう、今まで支えてくださった方々に恩返しができるような音楽家になれたらなと思います。

望月　僕も舞台に立ち続けて、お客様に自分の歌を通して感動を与えたり、笑いを届けたり、お客様を楽しませることをずっとやっていきたいですね。

前川　ずっと舞台に立ち続けて、お客様にハッピーになってもらえるような歌を歌っていけるよう努力したいです。また今回の公演を通して改めて感じたのは、武蔵野が音楽を学ぶうえでいかに恵まれた環境にあるかということ。後輩の皆さんには、今のうちに吸収できるものは何でも貪欲に吸収して欲しいと思います。

杉尾真吾　*Shingo Sugio*

埼玉県立秩父高等学校卒業。武蔵野音楽大学オペラコース試演会「愛の妙薬」にベルコーレ役で出演。選抜学生によるコンサート等に出演。これまでに若林浩子、加茂下稔の各氏に師事。現在、本学音楽学部声楽学科４年次在学中。本公演は合唱《奴隷》で出演。

仲松あかり　*Akari Nakamatsu*

沖縄県立開邦高等学校芸術科音楽コース卒業。第37回沖縄県高等学校音楽コンテスト独唱の部金賞。第62回瀧廉太郎記念全日本高等学校声楽コンクール第2位、副賞としてウィーン短期留学に参加。第54回全琉音楽祭大賞。平成21年度福井直秋記念奨学金「学修奨励金」受給。武蔵野音楽大学オペラコース試演会「愛の妙薬」にジャンネッタ役で出演。選抜学生によるコンサート等に出演。神谷智子、上地さとみ、平良栄一の各氏に師事。現在、本学音楽学部声楽学科４年次在学中。本公演では少年Ⅱを演じた。

▲ 少年Ⅱを演じた仲松さん（中央）

笑顔満開！ 春の学園行事

大学、高校、各幼稚園では、春の学園行事が順調にスタートしました。

大学では新入生歓迎会が開催され、“江古田新キャンパスプロジェクト”に伴い、江古田キャンパスから大学生活をスタートさせた新1年生のために、先輩たちがセレモニーや演奏会を企画し温かく歓迎❶。新入生は、先生、先輩、そして同級生と親睦を深める有意義な時間を過ごしました。

高校では、5月1日に体育祭が行われました。種目数の約半分を終えたところで、突然の降雨。急遽、場所を体育館に移し競技を続行しました。屋内での競技は迫力満点、クラスの一体感をさらに強くしてくれました。

さらに、2年生は5月30日より4日間、広島、神戸、京都、大阪へ修学旅行に出かけました。世界遺産の厳島神社と原爆ドーム、人と防災未来センター、雅楽体験、ユニバーサルスタジオジャパンなどを巡る充実した日程のもと、貴重な経験をしました。一方、1、3年生は飯能市の名所、名栗川渓流のキャンプ場で飯盒炊爨を行い、豊かな自然の中、各班さまざまな手料理を楽しみました。

第一、第二、武蔵野の各幼稚園ではさわやかな好季節のもと、遠足へ行ってきました。皆でゲームをしたり、スタンプラリーや散策を楽しみ、各園の園児とも笑顔溢れる一日を過ごしました❷。

春期公開講座シリーズ＆新人演奏会

新年度を迎えて、武蔵野音楽大学の春期公開講座シリーズ、新人演奏会が本年も目白押しに開催されました。

まず昨年度の本学音楽学部卒業生・大学院修士課程修了生による新人演奏会が、4月17日（音楽学部）、5月14日（大学院）、津田ホールで同窓会の主催により開催され、フレッシュな演奏を披露してくれました。［写真 P3・4］

公開講座シリーズの第1回として、カール・リヒターやモーリス・アンドレらとの共演で知られるヘトヴィヒ・ビルグラム女史を招いて、5月21日オルガン演奏会をベートーヴェンホールで開催❸。リニューアルされた同ホールのパイプオルガンを駆使し、変化に富んだ鮮やかな音色でバロック作品などを演奏、聴衆を魅了しました。また同女史は5月25日チェンバロ公開講座をJ.S.バッハの「イギリス組曲第3番」をテーマに行い（通訳：寺本まり子）、作品の歴史や和声構造、各曲の舞曲の性格など実演を交えて説明を行った後、全曲を演奏、奥深い講座となりました。この他、5月31日には、同女史と本学客員教授のクルト・グントナー氏によるJ.S.バッハのヴァイオリンソナタ全曲演奏会も行われ、ヨーロッパの伝統と、深い学識に裏付けられたコンサートとなりました。

5月23日にはフルートの巨匠、ペーター＝ルーカス・グラーフ氏の公開講座、および現代最高のテューバ奏者と称されるローランド・セントパリ氏のコンサート（ピアノ：小池ちとせ）と公開講座が同日に行われ、熱心な学生達で溢れた熱気ある催しとなりました。

5月24日にはグレゴリー・フェイギン（Vn.）、エレーナ・アシュケナージ（Pf.）両教授夫妻によるデュオ・リサイタル❹。タネーエフやプロコフィエフなど高度な技術を要するロシア作品に加え、ドビュッシーやラヴェルなどの繊細な作品が演奏され喝采が。

また本学ではお馴染み、エレナ・オブラスツォワ教授によるリサイタル（ピアノ：三ッ石潤司）が6月8日に行われ、リストやプーランクなどフランス歌曲などをますます磨きのかかった美しい声で歌い上げ、感動の拍手がなりやみませんでした❺。

別掲のように本年もますます充実した武蔵野の演奏会・公開講座シリーズ、今後もご期待ください。

武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」開催

武蔵野音楽大学オペラ公演が、去る4月29日、30日、5月2日、3日の4回にわたり江古田キャンパスのベートーヴェンホールで開催されました。

今回の演目は、モーツァルト「魔笛」―全2幕、ドイツ語上演（字幕付き）―。指揮に、現在ベトナム国立交響楽団の音楽監督・首席指揮者の本名徹次氏、演出には新国立劇場を始め、数々のオペラ演出を手掛ける十川稔氏を迎えました。キャストは、内外のオペラ界でプロとして活躍する教員、卒業生と学生のオーディション合格者によるダブルキャストを組みました。

立ち稽古、音楽稽古、ゲネプロを通して、初めて出演する学生、オーケストラメンバーは、先輩方から様々なものを学び、貴重な経験となりました。本番では、舞台監督、美術、照明、メイク、衣装など一流のスタッフの支えでA組、B組それぞれの持ち味が遺憾なく発揮され、全公演ともに満席となった聴衆を魅了し、レベルの高い舞台で大成功のうちに幕を閉じました。

※このオペラの若手出演者による座談会を本誌P8～10に掲載しています。併せてご覧ください。

平成22年度卒業・修了生の会 開催

去る3月25日、本学ベートーヴェンホールで平成22年度の学部卒業生、大学院修士課程修了生の「卒業・修了生の会」が行われました。

昨年度は、東日本大震災の影響で、多数の大学で卒業式が中止になりました。学生生活を締めくくり、社会人として第一歩を進める節目の卒業式を取りやめることは、武蔵野にとっても苦渋の選択でした。その後卒業生、修了生たちから、卒業式に代わるような催しが行えないだろうかとの声が挙がり、この春実現の運びとなりました。

当日は全国から216名の卒業生が集い、通常の卒業式と同様、厳粛な雰囲気の中開催され、式の終わりには舞台上で先生方と集合写真を撮りました。その後、モーツァルトホールに場所を移し、卒業生主催による懇親会が開催され、仲間たち、先生方との懐かしい再会を果たしました。会は大いに盛り上がり、最後には全員で「蛍の光」を合唱して締めくくりました。

集った卒業生たちは、「学生生活の区切りができて気持ちの整理がついた。これから新たな気持ちでスタートできる」、「震災の復興と共に過ごした厳しい1年間だった。その記憶と共に、一生忘れられない会になった」などと感激を胸に、大学の門を後にしました。

●表紙の顔

丸山 勉さん

丸山 勉さんは、武蔵野音楽大学在学中、日本フィルに1、3番ホルン奏者として入団。'90年に読売日本交響楽団に移籍、首席ホルン奏者を10年間務めました。

長野県出身。13歳よりホルンをはじめ、和方寛茂、故伊藤泰世、D.クレベンジャーの各氏に師事。武蔵野音楽大学を卒業後、'93年にはジュネーブに留学、B.シュナイダー氏に師事しました。

第8回日本管打楽器コンクール・ホルン部門第1位入賞。ソリストとしてカナダのバンフ、日本で開催された世界ホルンフェスティバル等にゲストとして招かれる他、日本フィル、東京交響楽団等、数々の著名な楽団と共演しました。

また、ビクターエンタテインメントよりソロCD「ルネッサンス」他、ソロ及び室内楽で多くのCDをリリースしています。出演・監修でもスタジオジブリ作品集、ホルン・デュエットアルバム、上手になりたい！管楽器」VOL.3「ホルン編」（ビクターE）など多数に携っています。その他、地方でのリサイタルシリーズやホルンクリニックの指導者として各地でのホルン演奏技術向上と発展普及活動に積極的に活動。さらに日本音楽コンクール、日本管打楽器コンクールのホルン部門および日本ホルンコンクールの審査員を務めるなど幅広く活動しています。

現在、オーケストラ奏者として日本フィルハーモニー交響楽団、紀尾井シンフォニエッタの首席奏者を務めると共に、ソロ、室内楽奏者として、東京ホルンクヮルテットなどのメンバーとしても活動。武蔵野音楽大学非常勤講師。日本ホルン協会常任理事。

【今後の音楽活動】

7月 日本フィル　さいたま＆横浜定期公演
　　および東京定期公演
8月 つの笛集団銚子公演＆つの笛キャンプ
　　(8/17.18)
9月 紀尾井シンフォニエッタ定期公演
　　日本フィル東京定期公演
　　福岡大学附属若葉高等学校吹奏楽部
　　コンサート　ソロ出演(9/8)
10月 ホルンイベント
　　「ボスキャンプ in 札幌」(10/7.8)
　　日本フィル　名曲コンサート＆
　　横浜定期　および東京定期公演
　　紀尾井シンフォニエッタ定期公演
11月 紀尾井シンフォニエッタ宮崎、
　　大分公演　日本フィル東京定期公演
　　カスタム・ウインズ公演 in
　　ヤマハホール(11/30)
12月 日本フィル第9公演等予定

平成24年度 同窓会全国総会のお知らせ

平成24年度武蔵野音楽大学同窓会全国総会は、来る8月5日㈰午後6時より、東京都「東京ドームホテル」にて開催いたします。お誘い合わせの上、ぜひ多数ご来会ください。

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●ジュリアード音楽院（アメリカ）声楽専攻学生の中より、
特に優秀な学生一人に授与される「マキコ・ナルミ・プライズ（鳴海真希子賞）」を日本人として初めて受賞。
大西　宇宙（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
●ゲルダ・リスナー国際声楽コンクール2012（アメリカ）第3位入賞
大西　宇宙（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
●マルチェッロ・ジョルダーニ国際声楽コンクール2012（アメリカ）ファイナリスト
大西　宇宙（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
●アスペン音楽祭（アメリカ）に奨学生として参加。　大西　宇宙（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
●第28回　イスマエーレ・ヴォルトリーニ国際声楽コンクール（イタリア）
ファイナリスト、ファイナルコンサート出場　太田　優子（平成20年大学卒声楽専攻）
●第31回　飯塚新人音楽コンクール　声楽部門　第1位入賞、文部科学大臣賞、朝日新聞社賞、飯塚市長賞、飯塚文化協会飯塚賞 受賞
但馬　由香（平成12年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
●第4回　野島稔・よこすかピアノコンクール　第1位入賞　渡邉　孝太郎（平成17年大学卒ピアノ専攻）
●ノルウェー　クリスチャンサン交響楽団にフルート・ピッコロ奏者として正式入団（平成24年1月より）
三浦　真実子（平成15年大学卒フルート専攻）
●山形交響楽団ヴァイオリン奏者として入団（平成24年5月より）　溝邉　奈菜（平成24年大学卒ヴァイオリン専攻）
●第36回　鳥取市文化賞受賞　西岡　千秋（昭和54年大学卒声楽専攻）

●第19回　ペトロフピアノコンクール　ピアノ連弾部門　第1位入賞　佐々木　智令（平成23年大学卒ピアノ専攻　本別科修了）／佐々木　視令（平成23年大学卒ピアノ専攻　本別科修了）、大学・一般部門　第2位入賞（1位なし）　野上　剛（平成24年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程1年次在学）●奏楽堂日本歌曲コンクール　第23回歌唱部門　奨励賞受賞　山本　有希子（平成12年大学卒声楽専攻）、入選　武澤　佳絵（平成15年大学卒声楽専攻本大学院修士課程修了）　●第1回　全日本大学ピアノ演奏チームコンテスト　第1位入賞（チーム優勝）　安齋　周（平成17年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）／椿本　紘巳（平成18年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）／久守　あさひ（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）／伊藤　正騎（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）、ピアノデュオ部門　聴衆賞受賞　久守　あさひ（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）／伊藤　正騎（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）　●第14回　日本ジュニア全管打楽器コンクール　マリンバ部門　高校生コース　金賞受賞　古家　啓史（本高校3年次在学マリンバ専攻）　●第14回　“万里の長城杯”国際音楽コンクール　打楽器部門　大学の部　第2位入賞　松澤　美希（大学1年次在学マリンバ専攻　本高校卒）、第3位入賞　鈴木　詩織（大学1年次在学マリンバ専攻　本高校卒）、打楽器部門　高校の部　第4位入賞　古家　啓史（本高校3年次在学マリンバ専攻）、ピアノ部門　大学の部　第4位入賞　野村　なつき（大学1年次在学ピアノ専攻）、第5位入賞　實石　桂（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）、ピアノ部門　一般の部A　入選　白浜　晴奈（平成21年大学卒ピアノ専攻）、ピアノ部門　小学校の部A　第3位入賞　今成　彩乃（附属多摩音楽教室在室　聖セシリア小学校1年生）、ピアノ部門　小学校の部C　入選　海老澤　まい（附属江古田音楽教室在室　市川市立鶴指小学校6年生）　●「マリンバ・スピリチュアル」演奏コンテスト　優秀賞受賞　加賀谷　巧（大学3年次在学マリンバ専攻）／鎌谷　彩由美（大学3年次在学打楽器専攻）／會田　瑞樹（平成24年大学卒打楽器専攻　本大学院修士課程1年次在学）／本川　一也（大学3年次在学打楽器専攻）　●第3回　全日本ピアノ・オーディション　Special部門第3位銅賞受賞　谷地　紗織（平成21年大学卒ピアノ専攻）　●第1回　JILA打楽器コンクール　ソロ部門　第3位入賞　鎌谷　彩由美（大学2年次在学打楽器専攻）　●第13回　洗足学園ジュニア音楽コンクール　打楽器部門　高校生独奏の部　優秀賞受賞　古家　啓史（本高校3年次在学マリンバ専攻）●第5回　ベーテンピアノコンクール　全国大会　自由曲コース　一般AI部門　第4位入賞／2011アジア国際音楽コンクール　社会人ピアノ部門　第5位入賞／第3回　コンコルソ Music Arte　ステッラ部門　一般の部　奨励賞受賞／第21回　日本クラシック音楽コンクール　全国大会　ピアノ部門一般の部（女子）　入選／第16回　JILA音楽コンクール　ピアノ部門　入選　澤井　聖子（平成6年大学卒ピアノ専攻）　●第22回　全日本ジュニアクラシック音楽コンクール　全国大会　大学生の部　作曲ソロ部門　奨励賞受賞　豊村　春香（大学3年次在学作曲専攻）、弦楽器部門　小学生高学年の部　奨励賞受賞　宮地　莉央（附属入間音楽教室在室　所沢市立椿峰小学校5年生）　●第27回　レ・スプレンデル音楽コンクール　ピアノ部門　審査員賞受賞實石　桂（大学3年次在学ピアノ専攻　本高校卒）　●第5回　近・現代音楽コンクール　審査員賞受賞　水鳥　智栄子（大学3年次在学ピアノ専攻）　●第21回　日本クラシック音楽コンクール　全国大会　打楽器部門　大学の部（男子）　入選　窪田　想士（大学1年次在学打楽器専攻）　●第10回　ブルクハルト国際音楽コンクール　ピアノ部門　入選　澤井　聖子（平成6年大学卒ピアノ専攻）　●第16回　PIARAピアノコンクール　西関東地区大会　シニアC部門　アポロ努力賞受賞　八十田　志保（大学2年次在学ピアノ専攻　本高校卒）　●第17回　「静岡の名手たち」オーディション　合格　鈴木　梨紗（平成22年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）　●日墺文化協会フレッシュコンサート2011年度オーディション　管弦打楽器部門　合格　安藝美雪（大学3年次在学フルート専攻）　●第52回　東京国際芸術協会新人演奏会オーディション　ピアノ部門　合格　伊藤　瞳（大学4年次在学ピアノ専攻）●2012年度　創設39周年　家永ピアノ・オーディション　合格、合格者演奏会に出演　川島　大明（平成23年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程2年次在学）　●平成23年度　耕心館ジュニア・ピアノコンテスト　C（中学生）の部　瑞穂町長賞受賞（1位）　市村　ひかり（附属入間音楽教室在室　所沢市立所沢中学校3年生）　●第3回　全日本ジュニアピアノコンクール　D課程　第6位入賞　今成　彩乃（附属多摩音楽教室在室　聖セシリア小学校1年生）

MUSA SHINO 掲示板

二つの交流協定を締結

國立臺灣師範大學との国際交流協定

今後、積極的に進められていく音楽芸術の国際化の流れの中で、国外との音楽に関する交流や教育研究に関する協力を進めていくことは大変有意義なことであり、このたび國立臺灣師範大學と武蔵野音楽大学は、友好な協議を経て、音楽芸術教育で広く交流を行うことに合意し、2011年11月8日、國立臺灣師範大學において張　國恩學長と福井直敬学長により協定が締結されました。この締結を契機とし、学生・教員・研究者の交流、その他音楽に関する情報の交換等を通して、両大学が一層文化交流を深めていくことが期待されます。

公益財団法人新国立劇場運営財団との連携・協力に関する協定

これまでも武蔵野音楽大学と新国立劇場運営財団とは、オペラ公演における多くの本学教員の出演の機会を通して連携を図ってきましたが、新国立劇場運営財団と本学は、新国立劇場での公演、人材交流、人材育成などについて、一層幅広い連携協力を推進することとし、2012年5月21日、新国立劇場運営財団において福地茂雄理事長と福井直敬理事長により協定が締結されました。新国立劇場で、本学の教員や卒業生の活躍の機会が恵まれることは、歌手としての実力向上のための得難い機会となるでしょう。

平成24年度7月～10月公開講座・演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会
指揮＝リチャード・K.ハンセン
曲目＝サン＝サーンス：歌劇「サムソンとデリラ」より ダンス・バッカナール
八木澤教司：「ザ・ウエスト・シンフォニー」より 第4楽章 －地平線に沈む日輪は紅に燃え－
2012年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲より 他

7月 7日㊏ 14:00 熊本県立劇場 コンサートホール（熊本市） 一般¥1,500/小・中・高¥1,000〈全席自由〉
7月 8日㊐ 16:00 長崎ブリックホール 大ホール（長崎市） 一般¥1,500/小・中・高¥1,000〈全席自由〉
7月13日㊎ 18:30 東京オペラシティ コンサートホール ¥1,500〈全席指定〉

武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ
◎世界の名教授によるスペシャル・コンサート
ホルヘ・ルイス・プラッツ ピアノ・リサイタル 7月22日㊐ 18:00 ベートーヴェンホール（江古田） ¥2,000〈全席自由〉
曲目＝ショパン：24の前奏曲 Op.28、アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ Op.22 他

◎ピアノ音楽セミナー 7月26日㊍ 18:00 モーツァルトホール（江古田） ¥1,000〈全席自由〉
講師＝レフ・ナトチェニー
テーマ＝「ベートーヴェン ピアノ・ソナタの発展」－1790年代から1820年代の30年間にわたる進化の全容（作品2-1、57、111を実例として）－

武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 9月10日㊊ 19:00 東京オペラシティ コンサートホール ¥1,500〈全席指定〉
指揮＝北原幸男 9月11日㊋ 19:00 横浜みなとみらいホール 大ホール 一般¥1,500/学生¥1,000〈全席自由〉
ピアノ独奏＝福井敬介（大学3年）9月10日／山口ちなみ（大学院修士課程1年）9月11日
曲目＝ベートーヴェン：「エグモント」序曲、ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37、チャイコフスキー：交響曲 第6番 ロ短調 Op.74「悲愴」

武蔵野音楽大学管弦楽団ドイツ演奏旅行 9月20日㊍～10月1日㊊ ヘラクレスザール（ミュンヘン） 他
指揮＝ヨゼフ・ツィルヒ、ピアノ独奏＝福井敬介（大学3年）9月23日、26日／山口ちなみ（大学院修士課程1年）9月28日
曲目＝ツィルヒ：日本の印象、ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37、チャイコフスキー：交響曲 第6番 ロ短調 Op.74 「悲愴」

武蔵野音楽大学附属高等学校音楽科 在校生と新卒業生によるコンサート
※お問合せ＝武蔵野音楽大学附属高等学校 TEL.04-2932-3063 9月29日㊏ 18:30 王子ホール ¥2,000〈全席自由〉

武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 10月5日㊎ 18:30 ベートーヴェンホール（江古田） ¥1,000〈全席自由〉
指揮＝ヴィンフリート・トル 曲目＝オルフ：カルミナ・ブラーナ

お問合せ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108
※講師の病気、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※チケットは武蔵野音楽大学ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/ でも予約ができます。

平成24年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 夏期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	第1期 7月28日～7月31日	7月2日～7月13日（消印）	江古田キャンパス
	第2期 8月 2日～8月 5日	7月2日～7月17日（消印）	
高校音楽科受験講習会	7月28日～7月30日	7月2日～7月13日（消印）	
社会人のための夏期研修講座※	8月 2日～8月 4日	7月6日～7月20日（消印）	
免許法認定講習	7月25日～8月 5日	7月2日～7月13日（消印）	入間キャンパス

※社会人のための夏期研修講座は、下記の Ⅰ・Ⅱ より各1講座、Ⅲ より2講座を選択します。

Ⅰ
●中学生・高校生のためのピアノ指導法
●声楽指導法（レスタティーボからカンタービレまで、日本語の発声法と発語法、譚詩歌曲の表現法）
●編曲法の実際（アンサンブル＜含吹奏楽＞を編曲するための基礎知識と応用）
●音楽科指導の実際（中学校を中心とした新しい教育課程を踏まえた学習指導の実際）

Ⅱ
●小学生のためのピアノ指導法 ●器楽合奏（打楽器の基礎的な奏法と指導法）
●ソルフェージュ（ソルフェージュからの演奏法及び作品へのアプローチ）
●教材研究（ドビュッシーを中心に近代フランスの作曲家による楽曲について）

Ⅲ
●合唱指導 ●講話（オペラの魅力、オペラ演出のつぼ） ●カール・オルフの音楽教育
●個人レッスン（ピアノ、フルート、リコーダー、声楽のうちから1種類を選択）
●パイプオルガンのたのしみ「バッヘルベルだけではないカノンの魅力」
●音楽療法入門 ●楽器学入門（ピアノの歴史）

※上記の他に行われる演奏会は、受講者全員を対象としています。

◎実施日程、会場が昨年と変更となっている講習会があります。詳細は要項でご確認ください。
◎講習会要項の請求は、武蔵野音楽学園広報企画室 （TEL.03-3992-1125）またはホームページ、モバイルサイトにてお申し込みください。（要項は無料、郵送料は学園が負担します）
ホームページ：http://www.musashino-music.ac.jp/
モバイルサイト：http://musaon.jp/

平成25年度 音楽学部第1年次 入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学第1年次の平成25年度入学試験要項は、本学江古田キャンパスで取り扱っています。要項をご希望の平成25年度受験対象者の方には無料でお送りいたしますので、江古田キャンパス広報企画室あてにお申し込みください。

なお、本学ホームページまたはモバイルサイトからの請求も可能ですのでご利用ください。（お電話で入学試験要項を請求なさる場合は、請求者の住所、氏名、電話番号、学校名、学年、受験する学科〈楽器名等〉をお伝えください）

また、受験講習会受講者でご希望の方には、第1年次入学試験要項を講習会期間中に配付します。

【お問合せ・請求先】
武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1
TEL.03-3992-1125

編集後記

大成功裏におわった本学オペラ公演。秋には管弦楽団のドイツ演奏旅行が控えています。貴重な経験は、今後の音楽人生の大きな力になるでしょう（編）。

ポシェット 17世紀　フランス　全長46cm

ポシェットは、16世紀から19世紀にかけて使われた小型のヴァイオリンで、この名称は、奏者がポケットに入れて持ち運んだことに由来するといわれる。通常4弦だが3弦のものも見られ、一般的にヴァイオリンよりも4度ないし5度高いピッチで調弦された。また3弦のものは1オクターヴ高く調弦されることもあった。この楽器は、ヨーロッパ各地で様々な階層の人々に使われたが、特にフランスにおいては、宮廷舞踊の教師がダンスのレッスンに使用したことで知られる。

バロック様式と宮廷文化が栄華を極めた17～18世紀のフランスでは、王侯貴族の社交の場である舞踏会（グラン・バル）が数多く開催された。そこではバロック・ダンスが高貴で優美な舞踊として好まれ、貴族の子女はこぞってダンスを学び、華やかな社交界へのデビューを夢見た。このレッスンにおいて、ダンス教師は自ら演奏するポシェットを伴奏に、ステップや振り付けの指導を行ったのである。したがって、ダンス教師にはヴァイオリン演奏の技術が要求され、同時にダンス音楽を作曲できる作曲家としての能力も求められた。

絢爛豪華な宮廷で使われたポシェットは、自然に象牙や宝石で飾られ、贅をこらしたものが好まれていく。写真の楽器も、黒檀材の一木造り、ヘッドに彫刻された女性の顔などに、高級嗜好品としての趣が感じられる。ダンス教師にとって美しいポシェットを所有していることはステイタスであった。しかし、やがて宮廷文化の凋落と共に、ポシェットは次第に使われなくなっていく。レオポルド・モーツァルトは、1756年に『ヴァイオリン奏法』の中でこの楽器を紹介し、「すでに廃れてしまった」と記述している。

（武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵）

江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

武蔵野音楽大学楽器博物館は、「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」に関連し、平成24年4月より「江古田キャンパス楽器博物館」でのガイド・ツアーを中止しております。今後、この「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアル・オープンに向けて、9月1日より休館いたします。

なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館いたします。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

目 次

夢があるから強くなる …… 1
川淵三郎

卒業生インタビュー …… 5
フルートの新たな可能性を求めて
フルートデュオ 櫻舞 -aube- ／白石法久　山内豊瑞

音楽の万華鏡 …… 7
日本の「交響曲」100年　楢崎洋子

私の学園生活 …… 8
素晴らしいスタッフに支えられて感動体験
～武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」に出演して～

MUSASHINO NEWS …… 11
- 笑顔満開！ 春の学園行事
- 春期公開講座シリーズ＆新人演奏会
- 武蔵野音楽大学オペラ公演「魔笛」開催
- 平成22年度卒業・修了生の会 開催
- 平成24年度同窓会全国総会のお知らせ
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- MUSASHINO掲示板
- 平成24年度7月～10月公開講座・演奏会のお知らせ
- 平成24年度夏期講習会のお知らせ
- 平成25年度音楽学部第1年次入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発 行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）
http://www.musashino-music.ac.jp/

2012年7月1日発行　通巻第102号

モバイルサイト
http://musaon.jp/